第三編　人　口

渋　草　集　落

第一章　大正期以前の人々……一七五
一　江戸時代……一七五
二　明治期……一七七
三　大正期の人口……一八〇
第二章　太平洋戦争後の人口動態……一八二
第三章　海外移住の人々……一九〇

第一章　大正期以前の人々

一　江戸時代

現在の面河村に関する人口や集落を記した古いものは、伊予史談会所蔵の「久万山手鑑」である。これには「久万町土居通清氏の蔵本を写す」と記され、寛保前後の書記か、とある。寛保元年が、西暦一七四一年で、今から約二四〇年前のことであり、大味川、杣野の農民も参加した久万山騒動が起こった年でもある。それ以前の集落の形成は、伝説の域を出ていないと思われるので、本編の記述は、江戸時代から始めることにする。

さて、「久万山手鑑」は、松山藩政の立場から、久万山の村ごとに、生産・租税・戸数・人口・社寺などについて記したものであるが、面河村の人口、戸数については次のような記述がみえる。

大味川村　庄屋　小倉平左衛門
一　家数　百四拾弐軒
内
百拾九軒　百姓門
弐拾三軒　無縁家来
一　宗門人高　八百八拾五人
内
四百弐拾九人　男
四百四拾八人　女
四人　社人
弐人　山伏
弐人　瞽女
杣野村　庄屋　孫兵衛
一　家数　百六拾五軒

内
百五拾軒　百姓門
拾五軒　無縁
一　宗門人高　九百七拾五人

内
四百七拾九人　男
四百九拾四人　女
弐人　山伏

この記録で明らかなように、藩政上の単位としては、大味川村と杣野村に二分されており、加えて、大味川村の庄屋は、直瀬村の庄屋が兼務していたところから、当時の面河は直瀬とのつながりが深かったことが想像される。職業的には、圧倒的に農業が多く、社人(神に仕える人)、山伏(仏の道を修行する者)、瞽女(ごぜ=三弦を弾き銭を請う目の見えない女性)が数人いる程度である。農業に従事する者も、生産力の進んだ他の地域にみられるような、無縁(耕地を持たないか、わずかしか持っていない者)への分解が、少ない。なお、杣野村の山伏として、赤鬼法性院の伝説に出てくる法性院の名が登場されているのは別の面から注目される。

ともあれ、江戸時代中期の、享保十八年(一七三三)から寛保元年(一七四一)ころに、今日の人口を、約二五〇人も上回る一八六〇人もの人口が存在したことは、大きな驚きである。

さて、もう一つの「久万山手鑑」がある。こちらは、名智氏所蔵のものであるが、これによると、明和八卯年改として、次表のような記述がみえる。

明和八年は、一七七一年であり、さきの「久万山手鑑」の記録をかりに寛保元年(一七四一)とすると、あとの「久万山手鑑」の記録は、ちょうど三〇年後のものとなる。一八六〇人から二一五六人に増えたのだから、ほぼ一年に一〇人ずつ増えたことになる。これは、享保の大ききん(一七三二)の打撃から、生産や生活が立ち直っていきつつあることを推測させる。

もう一つ注目されるのは、今日の集落の原型がほぼ完全にできあがっていることである。前表の昼野々から明まで

村（集落）		家数	百姓	無縁	人口	男	女
大味川村		220	212	8	988	488	500
大味川枝村	昼野々	63	56	7	315	162	153
	相之木	15	15	0	75	38	37
	若山	47	41	6	275	138	137
	村内(本組)	55	48	7	262	132	130
杣野村		257	252	5	1168	591	577
杣野枝村	本村	27	25	2	130	66	64
	くろたい	7	7	0	44	22	22
	所藪	7	7	0	47	23	24
	西浦	8	8	0	60	32	28
	二又木	6	6	0	38	20	18
	池野藪	2	2	0	14	8	6
	相之峰	14	14	0	89	47	42
	渋草	37	33	4	(223)	←不明なので合計からさしひく	
	大成	22	21	1	120	55	65
	とゝろ	22	20	2	106	54	52
	笠方	37	31	6	236	115	121
	明(妙)	12	11	1	61	31	30

の集落名は、表記上の違いがある程度で、今日の集落名と同じである。

二　明治期

明治維新となり、幕藩体制は崩れ、明治四年（一八七一）の廃藩置県で中央集権国家が形成されることになった。中央集権の実をあげるためには最末端の機構整備が必要であり、明治四年（一八七一）末から翌五年初めにかけて、いわゆる郡制改革が行われた。さらに、大区・小区制が、明治五年十月から設定され、上浮穴郡は第一七大区、面河は、杣野が第二小区・大味川が第三小区となった。

このころの小区ごとの解説をした「地理図誌稿」には、次のような記述がみえる。

北番村杣野分　第二小区
戸数　二百五十三戸

人員　千二百八十八人　男　六百七十九人
　　女　六百九人

北番村大味川分　第三小区

戸数　二百二十二戸
人員　千百六十三人　男　六百十六人
　　女　五百四十七人

この記録をかりに明治五年（一七七二）のものとすれば、さきの明和八年の記録から約一〇〇年経過した時点のものということになる。とすれば、面河の人口は一〇〇年間に二九五人、つまり、一年平均約三人の伸び率で、さきの寛保から明和まで三〇年間の伸び一年に三〇人に比べてはるかに悪いことになる。これは、天保の大ききん（一八三三～一八三九）や藩の収奪強化によるものであろうが、それでも、次表の松山藩全体の人口増減表からみるとまだよい方なのである。

松山藩人口増減表

年　　代	人　　口	指　数
享保6（1721）	172299	100
延享1（1744）	157387	91
明和5（1768）	157508	92
文化1（1804）	158031	92
天保11（1840）	168869	98
安政5（1858）	169039	98

田中歳雄著「愛媛県の歴史」より抜粋

さて、明治二十三年（一八九〇）十月一日、村制施行により、杣野・大味川の一字ずつをとり、杣川村となるのであるが、人口は、「面河村戸口推移一覧表」のとおり、明治年間、いちおう順調な伸びを示すようになる。

しかし、明治も四十年代に入ってくると減少傾向が表れてくるが、産業革命と地主制の展開が並行した結果と思われる。この間の事情について、明治四十三年十一月二十日付けで、上浮穴郡長に出した「杣川村郷土誌」の中で石墨尋常小学校長棟田照次郎は、次のように述べている。

杣川村ハ現在玆八年以前ノ収益ニ比較スレバ、米・麦・黍ハ二割弱の増収アリタレドモ林産ノ如キハ却テ減少セシニ拘ハラズ其経費ハ一躍シテ五倍四千二百余円ノ巨額ニ上リ貧民ハ何レモ之ガ負担ニ苦シミ免税戸数ノ如キハ玆五、六年間ニ殆ド八十ヲ越エントスルノミナラズ小地主亦小作人中ニハ現在ニ於テスラ尚年々砂産者ヲ続出スルノ現状ナレバ爾後十数年経費ハ此歩

合ヲ以テ増加シ其収入高現在ニ止マラバ全村挙テ破産スルニ至ルヤモ斗リ難シ。

また、彼は、出稼人・寄留人の一覧表を付したうえで、次のような見解も述べている。

本村ハ開拓セラレタリト雖維新前四・五十年迄ハ戸口少ク且ツ村内到ル処老樹蓊蒼タリキ然ルニ維新前後ニ至リ交通ノ道漸ク開ケ材木ノ需用ヲ増スニツレ杣木挽等材木仕成ニ入リ来リ住所ヲ占ムルモノ甚ダ多ク戸口俄ニ増加スルニ至レリ然レ共現在ニ於テハ樹木ハ殆ド伐裁（ママ）シ尽シタレバ土地ノ収穫ハ是等ノ人ノ需用ヲ支フルニ足ラザルガ故ニ寄留或ハ出稼人ハ年々増加シツアリ（中略）本村ニ於ケル出稼人ハ四季ニヨリ或ハ月ニヨリ大ニ其数ヲ異ニスレ共夏秋ノ二季ニ最モ多ク春ハ之ニ次ギ冬ハ何レモ帰村スルヲ常トス本村中出稼人最モ多キハ笠方ニシテ若山及ビ渋草之ニ次グ

また、笠方尋常小学校長大西峰次郎は、明治四十三年十一月四日付の「郷土誌調査報告」で、笠方地区の自然増（減）の状況を次のように報告している。（一八〇ページ）

これをみると、限定された笠方地区だけではあるが、増減の変動が大きく、不安定な生活状態であったことが推察できる。

杣川村出稼人一覧

出之方面	出稼人員 男	女	計	同上職業別 農	工	商	其他	計
四〇	六	四六	五	三二	五	四	四六

杣川村寄留人一覧

出入別 ＼ 種別	寄留人員 男	女	計	職業別 農	工	商	其他	計
入ノ方面	五一	三〇	八一	三五	一五	二五	六	八一
出ノ方面	八四	五四	一三八	一五	五八	二七	三八	一三八

備考
入方面ノ本籍地ハ諸方面ニ亘ルガ故ニ記入シ難キモ新居郡及ビ周桑郡方面ヨリ入リタルモノ多シ。 出方面ハ広嶋及ビ呉ヲ第一トシ次ニ松山川上地方亦多シ其他諸方面ニ亘ルガ故ニ略ス。

出産十ケ年比較

	明治三十三年	〃三十四年	〃三十五年	〃三十六年	〃三十七年	〃三十八年	〃三十九年	〃四十年	〃四十一年	〃四十二年
男	六	一二	七	五	一二	一六	一四	一三	一六	四
女	五	一五	一二	五	八	一〇	一〇	一八	一三	一〇

死亡十ケ年比較

	明治三十三年	〃三十四年	〃三十五年	〃三十六年	〃三十七年	〃三十八年	〃三十九年	〃四十年	〃四十一年	〃四十二年
男	九	一〇	九	一二	九	一一	八	七	一〇	一二
女	四	一二	九	八	一〇	五	八	四	八	九
自然増減	△二	五	一	△一〇	一	一〇	八	二〇	一一	△七

△印は減

三　大正期の人口

大正・昭和期の人口は、国勢調査の資料で郡内他町村と比較して五年ごとに動きを見てみる。明治四十三年を一〇〇として、面河村の人口は、大正十四年、九五に落ち込むが、他は、順調な伸びを示している。郡内他町村の動きもほぼ同様で、第一次大戦後の不景気時期に人口が流出し、金融恐慌(一九二七)、世界恐慌(一九二九)という未曽有の経済危機を迎えると、また上浮穴の人口には増勢に向かっているのである。ここに、都市経済の安全弁としての農村の姿がみてとれるようである。大正十年には四二九人、同十五年には一〇八六人もの人口が、面河から北九州の炭鉱や銅

郡内町村別人口推移

		明治43 1910	大正4 1915	大正9 1920	大正14 1925	昭和5 1930	昭和10 1935	昭和15 1940	昭和20 1945
面河村（杣川村）	実数	3693	4210	3907	3504	3859	4285	4274	4935
	指数	100	114	106	95	104	116	116	134
久万町	実数	10876	11575	11464	10967	11980	10902	10848	14679
	指数	100	106	105	101	110	100	100	135
小田町	実数	9749	9915	9084	8990	9306	9103	8993	10825
	指数	100	102	93	92	95	93	92	111
仕七川村	実数	2687	2985	3070	2650	2709	2907	3084	3812
	指数	100	111	114	99	101	108	115	142
弘形村	実数	3319	3526	3613	3402	3385	3905	3283	3971
	指数	100	106	109	103	102	118	99	120
中津村	実数	2971	3205	3312	2875	3072	3088	3228	3880
	指数	100	108	111	97	103	104	109	131
柳谷村	実数	3380	3578	3853	3558	3853	3905	4443	4643
	指数	100	106	114	105	114	116	131	137
合計	実数	36675	38994	38303	35946	38164	38095	38153	46745
	指数	100	106	104	98	104	104	104	127

今日の久万町槙谷は、仕七川村に含まれている。今日の美川、柳谷は旧村でまとめた。
県統計課国勢調査資料―上浮穴農林業史

山へ向かって流出している。

さて、昭和に入ると、満州事変（一九三一）、日華事変（一九三七）、太平洋戦争（一九四一）と相次ぐ泥沼の戦争に突入し、戦争犠牲者も相次いだのであるが、漸増の傾向をたどり、終戦の年には、疎開者・復員者・一時帰農者などで農村の人口はふくれあがり、面河村でも四九三五人とこれまでのピークを迎えることになる。

第二章　太平洋戦争後の人口動態

戦争による産業の全面的な打撃で、品不足なかでも食糧不足は深刻であった。昭和二十一年には六月までに餓死者が、東京・横浜だけで一三〇〇人に達し、五月十九日の食糧メーデーには二五万人が集まるほどであった。こんな状態であるから、農山村へ流れ込んだ人口は、なかなか都市へ還流するところまでいかなかった。昭和二十三年には、面河村の人口がついに五〇〇〇人を突破、翌二十四年には、今日の資料でつかみうる最高の人口、五〇二八人を記録している。

しかし、昭和二十五年、朝鮮戦争の開始により、米軍が発注した「特需」によって、日本経済は戦争景気に巻き込まれ、鉱工業生産指数は、昭和十年を一〇〇として、昭和二十四年の七八から、昭和二十六年には一二二と、一気に戦前の水準を越えた。こうして都市の生産の復活とともに、人口はまた都市へと流れ始めたのである。

これを、さらに決定的なものにしたのが、経済審議会答申の「国民所得倍増計画」を受けた、池田内閣の高度経済成長政策であった。これは、一口にいって、生産性の低い第一次産業を切り捨てて、生産性の高い第二次・第三次産業へ資本や労働力を集中させることであった。池田内閣は、昭和三十六年、「農業基本法」を成立させ、それに基づいて、全農家の約三〇％に当たる一・五ヘクタール以上の農家を、大型機械の導入・生産性の高い農業への転換で収入をあげる一方、残りの中農零細農には離農を迫る「農業構造改善事業」をスタートさせた。また、歴代の内閣は、貿易の自由化を併行させたので、アメリカの余剰農産物が流入し、日本農産物の自給率は、昭和三十五年から昭和五

十年までの一五年間に、総合で九〇%から七四%に、穀物では八三%から四三%に、飼料は六七%から三一%に激減した。農業だけでは生活できなくなった農民の出稼が急速に増え、専業農家は三四・三%から一二・四%に、第二種兼業農家は三二・〇%から六二・一%にと激動した。

面河村の場合も、次表のように、高度成長政策が打ちだされた昭和三十五年から減少率が激増している。この政策の一環としての、「道前道後水利事業」が進行し、面河ダムに水没した「面河の穀倉地帯」が大部分離村することになったからではあるが、この事業が完成した昭和三十九年以後も減少率が鈍らないのはダム建設という特殊事情によるものではないことを証明している。

また、産業別人口構成は図のとおりであるが、昭和五十年の第一次産業に就業する人口が五八・四%とかなり高いようである。しかし、この中には、実質農林業に従事していない人口がかなり含まれているとみるべきで、農林業の破壊は、この数字よりもっと深刻である。

面河村人口減少率（5年ごと）

	実　数	減少数	減少率%
昭和25	4973	—	—
30	4764	209	4.2
35	4500	264	5.5
40	3273	1227	27.3
45	2465	808	24.7
50	1795	670	27.2
54	1613	182	10.0

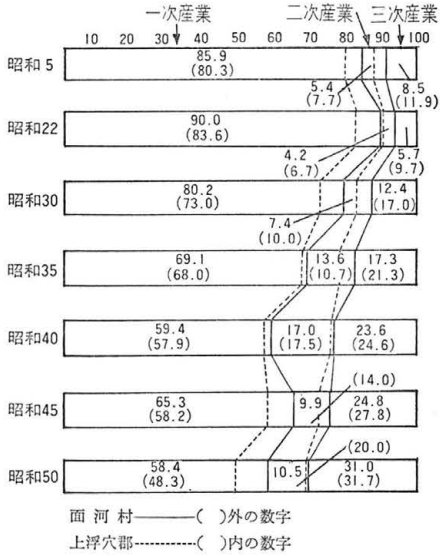
54年は8月末現在である。他は10月1日現在

また、集落別人口の推移は次表のとおりである。昭和二十五年（一九五〇）を一〇〇として指数で示したものであるが、村全体としては、昭和五十四年の今日は三二となり、明和八年の人口は、既に昭和四十五年から五十年の間に割っていることとなる。減少率の最も激しいのは、川ノ子の八、次いで笠方の一五、続いて、大成の一七、相ノ木の一九となる。逆に比較的減少の緩やかなので、渋草の五二、中組の四五、若山の四一である。小集落(小組)で、完全に姿を消したのは、面河ダムの湖底に沈んだところ以外に、笠方の人口がある。

なお、離村する者の中に、海外移住がかなり含まれていることは注目される。

面河村、上浮穴郡産業別人口構成比の推移

県統計課国勢調査資料　「上浮穴農林業史」P47
昭和50のみ第28図愛媛県統計年鑑



面河からの海外移住は、昭和九年（一九三四）から始まり、昭和三十六年まで、ブラジルへ一五世帯八七人、パラグアイ七世帯四九人、アルゼンチン一世帯四人、計二三世帯一四〇人ある。戦後は昭和二十七年から再開されており、愛媛県の戦後移住者合計が、一七八五人であるところをみると、面河の戦後移住者が一一七人もあるのは、極めて大きい数字であるといえる。

さて、人口動態をみる場合、出生と死亡とによる自然動態と、転入転出による社会動態があるが、次表の自然動態から、面河村は、美川・柳谷とともに、昭和四十～四十五年の間に自然減となり、以後ずっとこの傾向が続いていることがわかる。

この原因は、図に示した四つの年齢別人口構成グラフの推移でわかるように、山型からつりがね型、そして細長いつぼ型になり、高齢化社会で、若い生産年齢人口が極度に少なく、したがって、幼年人口も少ないという構造になってきていることにある。転出が転入を上回るという社会減の現象が激しく進行するうちに、自然減まで招来し、過疎化現象に拍車をかけることになったのである。

面河村は、人を取られ、水を取られ、土地を取られ、産業と集落の機能は崩壊しかかるという大きなピンチに立たされている今日である。

集落別人口の推移

過疎実態調査 10/1 ↓ 23.9.1 9/1

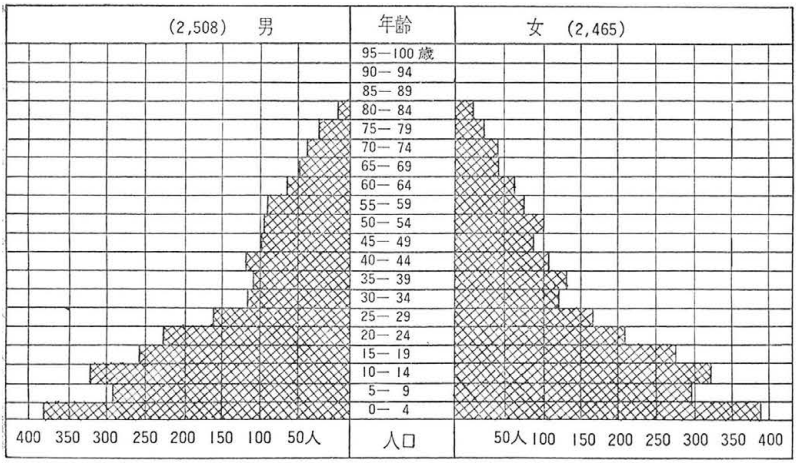
大字	組	元号	明和8	明治5	大正2	昭和25	昭和30	昭和35	昭和40	昭和45	昭和50	昭和54
		西暦	1771	1872	1913	1950	1955	1960	1965	1970	1975	1979
大味川	本組	人	262			585		459	325	281	206	198
		%	45			100		78	56	48	35	34
	中組		315			600		546	447	348	292	272
			53			100		91	75	58	49	45
	川ノ子					266		101	75	38	24	22
						100		38	28	14	9	8
	相ノ木		75			196		123	86	58	46	38
			38			100		63	44	30	23	19
	若山		275			576		678	572	387	258	236
			48			100		118	99	67	45	41
杣野	前組		333			596		586	409	339	218	181
			56			100		98	69	57	37	30
	相ノ峰		89			187		158	112	71	56	48
			48			100		84	60	38	30	26
	笠方		297			941		681	398	253	161	143
			32			100		72	42	27	17	15
	中山									13	5	5
	大成		120			247		153	133	71	48	42
			49			100		62	54	29	19	17
	渋草		329			818		1158	716	606	481	428
			40			100		142	88	74	59	52
	計		2156	2451	3813	5012	4764	4500	3273	2465	1795	1613
			43	49	76	100	95	90	65	49	36	32

町村別出生数、死亡数の推移

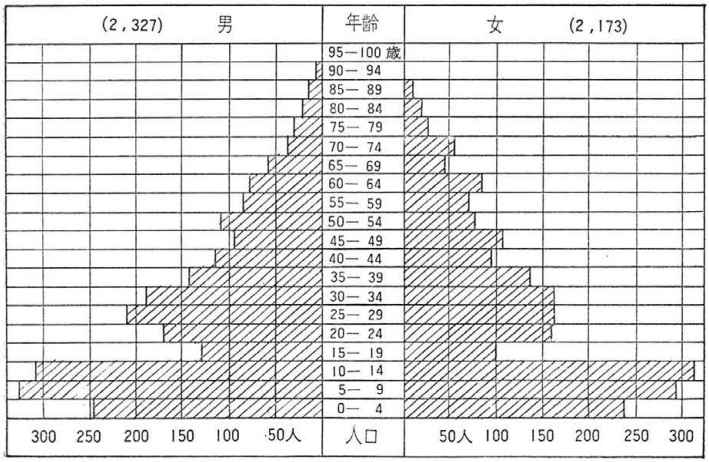
単位人

町村	項目＼年次	昭和25 1950	昭和30 1955	昭和35 1960	昭和40 1965	昭和45 1970	昭和50 1975	昭和52 1977	昭和53 1978
面	出　生	160	140	77	49	26	14	7	11
	死　亡	61	35	31	28	37	27	16	28
河	増　減	99	105	46	21	−11	−13	−9	−17
久	出　生	480	383	271	185	120	97	91	103
	死　亡	155	141	129	120	110	90	113	80
万	増　減	325	242	142	65	10	7	−22	23
美	出　生	375	274	173	130	50	31	19	23
	死　亡	160	87	92	83	58	55	34	33
川	増　減	215	187	81	47	−8	−24	−15	−10
柳	出　生	165	158	99	54	28	25	24	15
	死　亡	81	59	55	49	42	26	26	30
谷	増　減	84	99	44	5	−14	−1	−2	−15
小	出　生	406	277	221	115	72	64	76	62
	死　亡	155	81	99	80	54	50	60	51
田	増　減	251	196	122	35	18	14	16	11
合	出　生	1586	1232	841	533	296	231	217	214
	死　亡	612	403	406	360	301	248	249	222
計	増　減	974	829	435	173	−5	−17	−32	−8

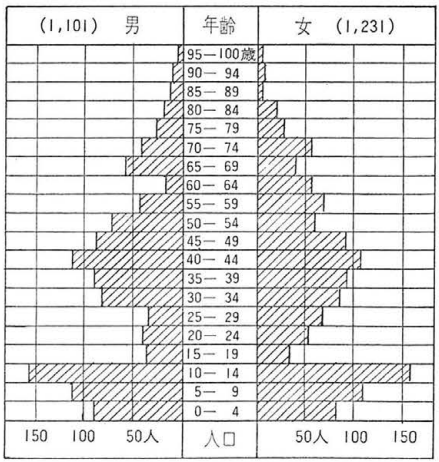
昭和25年（1950）年齢別人口グラフ　（総人口4,973人）



昭和35年（1960）年齢別人口グラフ
（総人口4,500人）

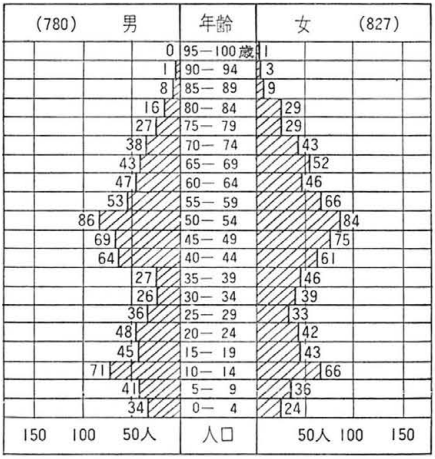


昭和45年（1970）年齢別人口グラフ
（総人口2,332人）



昭和54年（5月末）（1979）年齢別人口グラフ

（総人口1,607人）



面河村人口・戸数推移一覧表

年	代	人口	戸数	年	代	人口	戸数
明治5	1872	2451	475	大正13	1924	3453	607
34	1901	3444		14	1925	3504	742
35	1902	3483		15	1926	3353	584
36	1903	3514		昭和2	1927	3328	578
37	1904	3549		3	1928	3356	592
38	1905	3593		4	1929		614
39	1906	3638		5	1930	3359	652
40	1907	3652		6	1931	3885	689
41	1908	3705		7	1932	4045	724
42	1909	3738		8	1933	4070	740
43	1910	3693		9	1934	4285	760
大正2	1913	3935	682	10	1935	4285	890
4	1915	4210		11	1936	4289	780
6	1917	3978		15	1940	4274	864
7	1918	3915	643	20	1945	4935	1022
8	1919	3913	653	21	1946	4858	
9	1920	3855	644	22	1947	4939	
10	1921	3907	647	23	1948	5012	
11	1922	3939	639	24	1949	5028	
12	1923	3581	617	25	1950	4973	984

年	代	人口	戸数	年	代	人口	戸数
昭和30	1955	4764	955	昭和44	1969	2715	741
34	1959	4885	932	45	1970	2465	682
35	1960	4500	1027	46	1971	2304	655
36	1961	4658	1133	47	1972	2102	633
37	1962	4612	1149	48	1973	1956	618
38	1963	4352	1142	49	1974	1890	604
39	1964	3893	1043	50	1975	1795	579
40	1965	3273	908	51	1976	1795	568
41	1966	3102	838	52	1977	1692	567
42	1967	3159	843	53	1978	1631	564
43	1968	2856	757	54	1979	1613	560

第三章　海外移住の人々

昭和五十三年（一九七八）六月十八日、この日が日本人のブラジル移住満七十周年である。

第一回移民七八一名を乗せた笠戸丸が、ブラジル、サントス港に入港したのが、明治四十一年（一九〇八）六月十八日のことである。戦前ブラジルに渡った移民の数は約一九万人、戦後は約六万人が移住した。

現在ブラジルには、サンパウロを中心に約七十五万人と推定される日系人が、ドイツ・イタリアその他の国の移住者に伍して、新しいブラジルの国づくりに参加している。

日本から渡った、一世たちの数は、約二五万人といわれ、残りは、ブラジル生まれの、二世・三世・四世たちである。

七〇年の歴史は、これを言い換えれば日本人が、全く日本と違う異質の社会・文化の中で、いかにして生活の根を下し、いかにして、適応したかの、なまなましい軌跡である。日本人は、多くの分野で、ブラジル社会に貢献した。特に、農業の領域では、作物の育種改良を行い、菜園芸農法を創出し、生産性の高い農業協同組合の発展に成功している。

現在日系人が所有する耕地面積は、五八〇万町歩、ブラジル農業の、三五パーセントは、日系人によって行われている。現在、日本の耕地面積は約五〇〇万町歩といわれるから、日本の耕地面積を、上回る農地を、日系移民が所有していることとなる。

一世のほとんどが農業移民として、ブラジルに渡り、たいへんな苦労を重ねてきたわけであるが、その労苦の中で、子供の教育を特に重視し、現在サンパウロ大学では、日系人の学生が約二〇%、大学教授や代議士、そして、ついに、大臣まで誕生した。

繰り返していおう。既に、「蒼氓」の時代ははるかな過去となった。

七十年祭を機会に、ブラジルの日系人は、大きくはばたこうとしている。

昭和九年三月、杣野村大野拓夫一家が当村から初めて、ブラジル、サンパウロに渡航した。爾来、昭和三十六年までの二七年間、一五世帯八七人がブラジルに移住している。

昭和二十年、日本が米・ソ・中国などの連合国に、無条件降伏し、朝鮮・台湾・樺太の南半を失い、「米」の生産量は、その年六〇〇万トン、明治以来の最低を記録し、七二〇万人の復員軍人、三一〇万人の海外引揚者が、狭い内地にひしめき合い、広大な新天地を海外に求め、昭和二十七年、海外移住が再開されるや、全国から六万二三九三人が、海外に移住している。

面河村での海外移住者は、ブラジル一五世帯八七人、パラグアイ七世帯四九人、アルゼンチン一世帯四人、合計二三世帯一四〇人である。

海外移住者の渡航前融資金に対する予算外債務保証について

当村出身の左記自営開拓移住者が渡航前融資金を、日本海外移住振興株式会社より借入れることについて、金五拾萬圓以内に対して債務を保証するものとする。

記

移住者住所氏名

愛媛県上浮穴郡大字杣野弐拾号六拾壱番地第壱

小椋勝清

右の予算外の保証について、地方自治法第一七九条第一項の規定により、専決処分する。

昭和三十七年二月二十二日

面河村長　重見　丈太郎

南アメリカは、日本からいえば、地球の裏側、遠く故山を離れ、気候風土の異なる、広大な国で、それぞれの生業に励みつつある。

移住者名簿

移住国	パラグアイ				
渡航年月日	昭和三十二年十二月二十八日、ぶらじる丸				
本籍地	杣野二〇番耕地第五番地第一				
日本の連絡先	松山市高井町一〇七六　小椋賀寿市（父）				
氏名	続柄	生年月日	職業	備考	
峯本盛重	家長	大正元、一二、一四	農業	昭和五十年七月十日付、パラグアイで死亡	
トヨ	妻	〃五、一二、二五			
信一	長男	昭和九、五、五			
豊重	二男	〃一〇、一二、一四			
重子	二女	〃一四、一、二六			
重己	三男	〃一六、四、一七			
幸四郎	四男	〃一八、三、一五			
正成	六男	〃二三、三、二一			

信子	三女	〃 二六、九、七	
道子	四女	〃 三〇、八、二	
タマ	長男の妻		

移住国　パラグアイ
渡航年月日　昭和三十五年八月十七日チチャレング号
本籍地　大味川二一番耕地九五五番地
日本の連絡先　大味川　川ノ子　梅木重春（従兄）

氏名	続柄	生年月日	職業	備考
峯本留吉	家長	大正七、一〇、一五	農業	
咲子	妻	〃 一三、四、二八		
ケイ子	長女	昭和二一、七、五		
国男	長男	〃 二五、一、一八		
幸男	二男	〃 二七、四、二		
三郎	三男	〃 二九、七、三		
幸正	四男	〃 三一、七、三一		
春男	五男	〃 三七、四、一〇		パラグアイで出生

移住国　パラグアイ
渡航年月日　昭和三十五年八月十七日、チチャレング号
本籍地　大味川二一番耕地第九五六番地
日本の連絡先　大味川　川ノ子　梅本重春（従兄）

氏名	続柄	生年月日	職業	備考
増本安清	家長	大正五、九、二五	農業	
多恵子	長女	昭和二〇、六、二〇		
八重子	〃	二六、三、三〇		
外二名				

移住国　パラグアイ

渡航年月日　昭和二十五年八月十七日、チチャレング号

本籍地　大味川二一番耕地九五六番地

日本の連絡先　大味川　川ノ子　梅本重春（従兄）

氏名	続柄	生年月日	職業	備考
西本春美	家長	昭和二、二、一〇	農業	
貞子	妻	〃五、四、一二		
洋一	長男	昭和二六、八、三〇		
俊一	〃	三〇、八、二三		
外二名				

移住国　パラグアイ

渡航年月日　昭和三十七年四月二日、あるぜんちな丸

本籍地　杣野二〇号六一番地六一

日本の連絡先　杣野、梅ケ市　小玉幸（弟）

氏名	続柄	生年月日	職業	備考
中川寿明	家長	昭和六、五、二五	トーフ製造業	
貞子	妻	〃 一〇、一二、一六		
瑞枝	長女	〃 三〇、九、一		
希志夫	長男	〃 三三、三、二		
ルイス		日本国籍なし		
マリオ				
サンドラ				

移住国　ブラジル　サンパウロ
渡航年月日　昭和三十四年八月二日、あめりか丸
本籍地　杣野一一番耕地二二四番地
日本の連絡先　杣野　渋草　中川重雄（父）

氏名	続柄	生年月日	職業	備考
中谷修	家長	昭和二、四、一二	商業	
咲子	妻	〃 五、四、一		
仲郎	長男	〃 二八、一、一		
聡子	長女	〃 二九、一、二一		
法正		日本国籍なし		
中川弘	甥	昭和一五、一〇、六		
桜武昭範	〃	〃 一六、一、一八		

移住国　ブラジル　サンパウロ

渡航年月日	昭和三十四年八月二日、あめりか丸
本籍地	杣野一三番耕地一〇九番地
日本の連絡先	新居浜市郷三二〇番地五　中谷昭子（姉）

氏名	続柄	生年月日	職業	備考
木村繁雪	家長	大正一二、一、二	クリーニング業	
美知子	妻	昭和二、九、三		
幸恵	長女	〃 二六、六、一		
知子	二女	〃 二八、五、二〇		
知一	長男	〃 三〇、九、一七		

移住国	ブラジル
渡航年月日	昭和三十四年八月二日、あめりか丸
本籍地	大味川二一番耕地二一一番地
日本の連絡先	上浮穴郡美川村東古味　谷本輝雄（兄）

氏名	続柄	生年月日	職業	備考
木下喜市	家長	大正四、一〇、二〇	農業	昭和四八、五、二〇死亡
カズエ	妻	〃 九、九、二〇		
福春	長男	昭和一四、一一、一		
安友	二男	〃 一九、二、一〇		
久子	二女	〃 一七、一、一一		
末雄	三男	〃 二四、一、二九		

美佐子	三女	〃	二二、	二、	二七
喜美男	四男	〃	二六、	一、	一三
朝美	四女	〃	二八、	八、	三
夏子	五女	〃	三〇、	七、	一一
益子	六女	〃	三二、	一一、	一

移住国　ブラジル　サンパウロ

渡航年月日　昭和三十四年八月二日、あめりか丸

本籍地　杣野一六番耕地一五番地

日本の連絡先　杣野　土泥　八幡春義（義弟）

氏名	続柄	生年月日	職業	備考
菅　辰雄	家長	大正五、一一、二四	農業	
スマ子	妻	昭和四、四、二		
盛重	長男	〃二九、一一、一七		
哲夫	二男	〃三一、七、二六		
広次	三男	〃三三、二、一一		
坂本澄夫	妻の長男	〃二六、一〇、一九		

移住国　ブラジル

渡航年月日　昭和三十四年八月二日、あめりか丸

本籍地　大味川三番耕地八一番地

日本の連絡先　上浮穴郡美川村田ノ浦大谷　坂本末茂（義父）

氏名	続柄	生年月日	職業	備考
久保清利	家長	昭和一二、一、一	農業	
みつ子	妻			
利明	長男	日本国籍なし		
幸子	長女			
外二名				

移住国　ブラジル　サンパウロ
渡航年月日　昭和三十四年十月二日、ぶらじる丸
本籍地　杣野一一番耕地五二番地六二
日本の連絡先　杣野　渋草　久保亀太郎（父）

氏名	続柄	生年月日	職業	備考
和田武雄	家長	明治四四、一、二四	農業	昭和四十五年七月二十七日死亡
フミ子	妻	大正八、一二、一二		
ケイ子	長女	昭和一七、四、七		
サチ子	二女	〃 二〇、四、二二		
ひろ子	三女	〃 二三、六、二三		
遠藤政秀	二男	〃 二七、八、二一		
高岡幸則	妻の弟	〃 一四、八、二		

移住国　ブラジル　サンパウロ
渡航年月日　昭和三十四年十一月二日、あるぜんちな丸

本籍地	大味川一六番耕地六八番地
日本の連絡先	杣野　渋草　高岡政綱（妻の弟）
氏名	続柄	生年月日	職業	備考
小椋勝利外二名		昭和一三、五、一	農業	単身渡航
移住国	ブラジル　サンパウロ
渡航年月日	昭和三十五年三月二日、あるぜんちな丸
本籍地	杣野二一番耕地一四六番地六二
日本の連絡先	杣野　笠方　小椋長次郎（父）
氏名	続柄	生年月日	職業	備考
重見隆郎	家長	昭和三、五、二〇	農業	
郁子	妻	〃　八、五、二二		
丈二	長男	〃　三〇、一二、二二		
さゆり	長女	〃　三四、一、二〇		
千秋	二女			
移住国	ブラジル
渡航年月日	昭和三十五年四月二日、さんとす丸
本籍地	温泉郡重信町牛渕六二七番地
日本の連絡先	杣野　渋草　重見庄三郎（兄）

氏名	続柄	生年月日	職業	備考
佐幸馬次	家長	大正七、七、四	農業	
ヤスヨ	妻	〃一三、一〇、一五		
哲夫	長男	昭和二五、二、三〇		
清重	二男	〃二二、六、六		
信幸	三男	〃二五、六、一五		

移住国　ブラジル　サンパウロ

渡航年月日　昭和三十六年十月二日、あふりか丸

本籍地　大味川二〇番耕地八五番地

日本の連絡先　大味川　若山　佐幸直輝（従兄）

氏名	続柄	生年月日	職業	備考
中川徳重	家長	昭和一三、四、一八	農業	
京子				
ムネノリ				
アウベルト				
レイジ				

日本の国籍なし

移住国　ブラジル　サンパウロ

渡航年月日　昭和三十四年八月

本籍地　杣野一一番耕地二二四番地

日本の連絡先	杣野　渋草　中川重雄（父）			
氏名	続柄	生年月日	職業	備考
平岡義澄	家長		大工	
フサ子	妻			
糸子	長女			
？	三女			
移住国	アルゼンチン			
渡航年月日	昭和三十五年六月			
本籍地				
日本の連絡先	大味川　相ノ木			
氏名	続柄	生年月日	職業	備考
増本安清	家長	大正五、九、二五	農業	
多恵子	長女	昭和二〇、六、二〇		
八重子	三女	〃二六、三、三〇		
外二名				
移住国	パラグアイ			
渡航年月日	昭和三十五年八月			
本籍地	大味川二一番耕地九五六番地			
日本の連絡先				